

平成27年度版

# 平和ってなに？



～戦争を知って平和を考えよう～

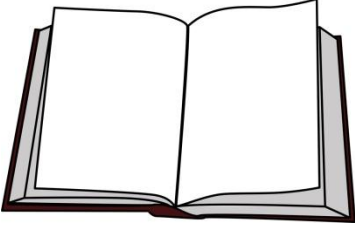

7月12日は「宇都宮市平和の日」

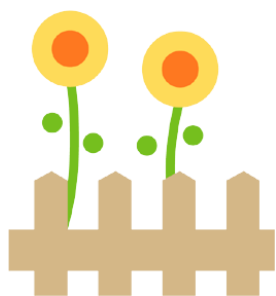
7月12日～8月15日は「宇都宮市平和月間」です

昭和20年7月12日深夜、第2次世界大戦の中、宇都宮に空襲がありました。宇都宮市では、平和を願い、この日を「宇都宮市平和の日」とし、7月12日から終戦日である8月15日までを「宇都宮市平和月間」と決めました。この期間中、宇都宮市内の図書館では、平和関連の本などを集めたコーナーを開設しています。あわせて、平和を考えるための図書のリストを作成しました。どうぞご利用ください。

## ■大人向けの本

<p>【凡例】 『本のタイトル』 著者 出版社 出版年 本を所蔵している図書館 中＝中央図書館 東＝東図書館 南＝南図書館 上＝上河内図書館 河＝河内図書館 ( ) 内は本の分類番号 概要</p>	<p>『戦争が終わった日 栃木県民が語る八月十五日』 編集工房随想舎／編 随想舎 1989 中・東・南・河 (K200.7) 本書は、昭和21年8月15日の栃木県民の体験談である。空襲・食糧難・学童疎開・勤労働員そして、肉親・友人の出征・戦死など。戦争が遠く離れた時代や地域のものではないことと、平和の大切さを知る。</p>
<p>『うつのみやの空襲』 宇都宮市教育委員会／編 宇都宮市教育委員会 2001, 2011 全館 (K210.7) (213.2) 宇都宮市の「戦災記録保存事業」の報告書。近代の宇都宮の歴史から、戦後の平和への道のりまでを、多数の写真や資料、市民への聞き取り調査などでわかりやすく記録している。</p>	<p>『実録！宇都宮大空襲』 徳田浩淳／著 宇都宮平和祈念館をつくる会 1999 中・南 (K390) 当時市役所に勤務していた郷土史家の徳田浩淳氏が、宇都宮大空襲のあった7月12日から19日までの一週間を、自身と家族の体験を中心に克明に記録したもの。</p>
<p>『宇都宮空襲の記憶』 宇都宮市平和委員会／編 宇都宮市平和委員会 2005 中・東・南 (K390) (K950) 昭和20年7月12日に起きた宇都宮大空襲当日の記憶を中心に、市民が自身の戦争体験をつづった記録集。当時の宇都宮市で起きた、九つの貴重な体験が収録されている。</p>	<p>『二荒山は炎の中に』 宇都宮平和祈念館建設準備会／編 随想舎 1992 中・東・南・河 (K390) (090) 宇都宮空襲・戦災の実態を、多くの図版や写真、絵を使い、分かりやすく解説。市民による宇都宮空襲の切実な体験談を交え、身近なところから平和を考える1冊。</p>

<p>『疎開した四〇万冊の図書』  <b>金高謙二／著 幻戯書房 2013</b>  <b>全館 (016.2)</b>          第二次世界大戦中、図書館の蔵書を戦禍から守るため、旧都立日比谷図書館の蔵書約40万冊が1年がかりで疎開した。図書館員や近隣の高校生たちの手で、どのように本は疎開したのか。また、帝国図書館を含む全国の図書館の蔵書が疎開した様子や、戦後の図書館についても記された、史実に基づいたドキュメンタリー。</p>	<p>『ヒロシマ一壁に残された伝言』  <b>井上恭介／著 集英社 2003</b>  <b>全館 (210.7)</b>          臨時の救護所「袋町国民学校」のコンクリートの壁には「安否をたずね、消息をしらせる短い伝言」が残された。平成11年に見つかったその「伝言」は、時を越えて、今を生きる家族、そして私たちへ、「愛」と「ヒロシマ」を伝えている。</p>
<p>『戦争中の暮しの記録』  <b>暮しの手帖編集部／編 暮しの手帖社 1972,2010</b>  <b>中・東・南・河 (210.7) (384)</b>          戦争中に人々は何を食べ、何を着、どのように働き、また移動したか。物資の窮乏や男子の動員、迫り来る戦禍の中、どのように生活を続けていったか。普通の人たちの生の声と写真によって、戦争中の暮しが身近なことから蘇る。</p>	<p>『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。』  <b>具志堅隆松／著 合同出版 2012</b>  <b>全館 (210.7)</b>          遺骨は雄弁に戦争を語る。30年間、沖縄の遺骨と戦争遺物を収集・記録してきた著者の経験から学んだ「戦争の現実」と、それを次の世代に引き継ぐための活動をまとめた記録。</p>
<p>『娘と話すアウシュヴィッツってなに？』  <b>アネット・ヴィヴィオルカ／著 山本規雄／訳</b>  <b>現代企画室 2004</b>  <b>全館 (234)</b>          フランスの歴史学者である著者が、娘の質問に答える形式で、アウシュヴィッツがどのようなものだったか、ユダヤ人ジェノサイドがどう進行したかを説明する。</p>	
<p>『硝煙の向こうの世界』  <b>渡部陽一／著 講談社 2012</b>  <b>全館 (319)</b>          戦場カメラマン・渡部陽一が実際に世界の4つの紛争地域を取材して見た“戦場の現実”。紛争国のデータと紛争の概要も記載し、「今何が戦場で起こっているのか」をわかりやすく解説した本。</p>	<p>『ノーモアヒロシマ・ナガサキ』(英文併記)  <b>黒古一夫／編 清水博義／編 James Dorsey／訳</b>  <b>日本図書センター 2005</b>  <b>全館 (319.8)</b>          被爆した広島・長崎の人々の様子や、街並の写真、被爆者の手による絵画作品など、原爆被害の悲惨さを伝える資料が収められている。本文は英文併記。</p>
<p>『平和のための名言集』  <b>早乙女勝元／編 大和書房 2012</b>  <b>全館 (319.8)</b>          平和の糧となるような名言・名句が選ばれ、1日1言として、366のメッセージが収められている。古今東西、小学一年生からブータン国王の言葉まで登場する。戦争と平和を考えるためのきっかけになる一冊である。</p>	<p>『ぼくは戦争は大きらい』  <b>やなせたかし／著 小学館クリエイティブ 2013</b>  <b>全館 (319.8)</b>          やなせたかし氏が自らの従軍体験をつづった本。戦争のことを語ってこなかった氏が、未来を生きる世代に残したいと、亡くなる直前まで語った最後のメッセージ。</p>
	<p>『戦火の子どもたちに学んだこと』  <b>西谷文和／著 かもがわ出版 2012</b>  <b>全館 (369.3)</b>          公務員からジャーナリストに転進した著者の、10年に渡る紛争地取材ノート。人々に苦難を強いる戦争の過酷な現実と、その中でも夢を捨てずに生きようとする子どもたちの姿が書かれている。今私たちに何ができるのか、考えさせられる本。</p>



『ヒトはなぜ戦争をするのか?』  
 アルバート・アインシュタイン／著 ジグムント・フロイト／著 浅見昇吾／編訳 花風社 2000  
 中・東・河 (391)  
 「人間を戦争というくびきから解放することはできるのか?」その答えとして、文化の発展が生み出した心のあり方と将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安こそが戦争への抑止力となることを明らかにしている。

『生きていてほしいんです』  
 田中和雄／編 童話屋 2009  
 全館 (911.5)  
 田中和雄と谷川俊太郎が共同編集した反戦詩集。原民喜、峠三吉などの詩に、谷川俊太郎の詩を織り交ぜた全41編の詩には、強い衝撃を受ける。その行間にある深い思いに、戦争とは何か、平和とは何かを改めて考えさせられる。

『黒い雨』  
 井伏鱒二／著 新潮社 2003  
 全館 (F)  
 原爆の激しさ、恐ろしさを声高に表現する作品が多い中、この作品は被爆者の日常をただ淡々と描いている。市井の人の上に冷たく降り注ぐ黒い雨。静かな光景が原爆の残酷さを際立たせ、平和の大切さを強く訴える。

『月光の夏』  
 毛利恒之／著 講談社 1995  
 全館 (F)  
 出撃前の最後の思い出にベートーヴェンのピアノソナタ「月光」を弾いた特効隊員がいた。鳥栖市に残る一台のピアノが持つ逸話をもとに作られたドキュメンタリー・ノベル。戦争の非情さを伝えると共に、語り継ぐことの大切さを教えてくれる。



『きけわだつみのこえ』  
 日本戦没学生記念会／編 岩波書店 1995  
 中・東・南・河 (915.6)  
 第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集。学生たちは、死を前にしてなお学問への情熱を絶やさず、真理と真実を探求しようとした。平和と自由への痛切な希望を後世に託している。

『アンネ・フランクの記憶』  
 小川洋子／著 角川書店 1995  
 中・東・南・河 (915.6)  
 作家への道を志すきっかけとなったアンネ・フランクの足跡を、作家小川洋子がたどる。旅の始まりは生家から。アンネ一家を支え続けたミープさんなど、アンネに縁のある人々も登場する。

『わたしの終戦記念日』  
 瀬谷道子／インタビュアー 新水社 2010  
 全館 (916)  
 少女から娘時代を戦争の中ですごした12人の女性が語る「戦争」とともに生きた日々と平和への思い、そこには、死と隣り合わせにありながらも柔軟にたくましく生き抜く女性たちの姿が記されている。

『原爆の子(上)・(下)』  
 長田新／編 岩波書店 2010  
 全館 (916)  
 自らも広島で被爆した編者が平和教育のために編集した原爆体験手記。原爆によって被害を受けた少年少女1175名の手記から選ばれた105篇を収録。広島少年少女たちの心に消えない傷痕をのこした原爆の恐ろしさを教えてくれる希有の記録である。

『長崎の鐘』  
 永井隆／著 日本ブックス 2010  
 全館 (916)  
 1946年脱稿、1949年初版発行。放射線医療の現場にいた著者が、科学者として、また、一市民の立場から、自ら体験した長崎の原爆投下を克明に描いた作品。

『総員玉砕せよ』  
 水木しげる／著 講談社 1995  
 全館 (C)  
 戦争を一兵士の側から書いた記録は数多くとも、当時を体験した漫画家だからこそ描けることがある。敗色が濃厚な激戦地で、部隊は玉砕を命じられる。立派な人も愚かな人も登場し、戦場のリアルさ、無意味さを訴えかける。

## ■子ども向けの本



### 『忘れないでください 宇都宮空襲の記憶』

小林新子／文 相原千草／絵 随想舎 2008  
全館 (K950) (090)

著者が中学1年生のときに体験した宇都宮空襲と、戦後の暮らしについて書いた本。私たちの住む宇都宮で、戦争はどんな爪あとを残したのか。もう二度と戦争を起さないために、今ある平和な暮らしを見つめるために、小林さんの記憶にふれてみよう。

### 『宇都宮大空襲 一少女の記録』

小板橋武／絵・文 随想舎 2007  
全館 (K950) (E03 コ)

昭和20年7月12日。恐れていた空襲がきた。夜中、アメリカ軍の飛行機がたくさん飛んできて、宇都宮に爆弾を落としていった。街は焼かれ、500人以上の人が犠牲になった。当時、中学1年生だった少女が体験した宇都宮大空襲の記録。

### 『なぜ戦争はよくないか』

アリス・ウォーカー／文  
ステファーン・ヴィタール／絵  
長田弘／訳 偕成社 2008  
中・東・南・河 (E01 ウ)

色鮮やかな平和な世界に、戦争は音も立てず、静かにひそやかに近づいてくる…。豊かな色彩で彩られたページとは対照的に、不気味な戦争の影を感じさせる本。

### 『さがしています』

アーサー・ビナード／作 岡倉禎志／写真  
童心社 2012  
中・東・南・河 (E01 ビ)

「おはよう」「いただきます」「いってきます」普通の日常が、あの日、一瞬でなくなってしまった。残されたものたちがあの日常の続きを今も探している。残されたものたちが日常から引き裂かれる痛みや悔しさ、寂しさを、静かな言葉で語る写真絵本。

### 『ちいちゃんのかげおくり』

あまんきみこ／作 上野紀子／絵  
あかね書房 1982  
全館 (E03 ア)  
H27年度教科書 - 3年

「かげおくり」はちいちゃんのおとうさんが教えてくれた遊び。ちいちゃんは一人でかげおくりをしながら、家族が来るのを待っている。戦争はちいちゃんから家族を奪ってしまった。幼い少女の目から見た戦争の物語。

### 『一つの花』

今西祐行／文 鈴木義治／絵 ポプラ社 1975  
全館 (E03 イ)  
H27年度教科書 - 4年

食物が不足していた戦争中、いつもおなかをすかせていた幼いゆみこの口ぐせは「一つだけちょうだい」だった。ある日、ゆみこのお父さんも戦争に行くことになった。出発するお父さんが、最後にゆみこにくれたのは、一りんのコスモスの花だった。

### 『せかいいちうつくしいぼくの村』

小林豊／作・絵 ポプラ社 1995  
全館 (E03 コ)  
H27年度教科書 - 4年

アフガニスタンの村、パグマン。平和だった国で内戦が始まってからも、パグマンでは春には草花が咲き乱れ、夏には果物が実り、人々はこの村で平和に暮らしていた。戦争の中でも力強く生きる人々とうつくしい村を描いた絵本。

### 『かわいそうなぞう』

土家由岐雄／文 武部本一郎／絵 金の星社 1970  
全館 (E03 ツ)

戦争が激しくなってきた東京。動物園では動物達が空襲によって逃げ出して暴れないよう、殺さなくてはならなかった。3頭のぞうにもついにその時がきてしまった。健気に生きようとするぞう達と、決断をせまられた飼育員達の苦しみが伝わってくる。

### 『ひろしまのピカ』

丸木俊／文・絵 小峰書店 1980  
全館 (E03 マ)

広島に原爆が投下されたのは、1945年8月6日午前8時15分のことだった。みいちゃんは、お父さん、お母さんと一緒に朝ごはんを食べていた。その時、それは突然やってきた。すさまじい光がつきぬけたかと思うと、何もかもが地獄絵のように変わってしまった。





<p>『3万冊の本を救ったアリーヤさんの大作戦』      マーク・アラン・スタマティー／作 徳永里砂／訳      国書刊行会 2012      中・東・南・河 (010)      戦火に侵されるイラクの街で、図書館の本を救わなくてはと奮闘する司書のアリーヤさん。たった数日で彼女は3万冊もの本をどのように救ったのだろうか。      2003年イラク戦争時、本当にあった話。</p>	<p>『絵で読む広島原爆』      那須正幹／文 西村繁男／絵 福音館書店 1995      全館 (210)      広島に落とされた原爆を、時間を追って、上空から見た絵で克明に再現した絵本。大きな町を一瞬でなぎたおした爆発のすさまじさがわかる。絵は、服装や建物を当時の住民に聞き、忠実に描かれている。原爆がどのように作られ、どうして広島に落とされたのかについても、図や年表で詳しく説明されている。</p>
<p>『平和の種をまく』      大塚敦子／写真・文 岩崎書店 2006      全館 (300) (319)      ボスニアには、民族のちがう人たちが一緒に働いている畑がある。戦争でばらばらになってしまった人たちはこの畑で助けあい、平和な生活を取り戻そうとしている。</p>	 
<p>『13歳からの平和教室』      浅井基文／著 かもがわ出版 2010      中・東・南 (310)      おじいちゃん、孫のはるき、はるきの友達のミクの、3人の会話形式で書かれている。      戦争や平和のほかに、「人間としてふさわしい生き方をする」「21世紀の国際社会がすべきこと」など色々なテーマが出ている。</p>	<p>『平和と戦争の絵本』(全6巻)      石山久男／編 大月書店 2002      中・東・南 (310)      1巻目は、「人はなぜ争うの？」というテーマで書かれている。      争いを解決するには、争っている人達ではなく、第三者にしかできないこともある。教室の中でも、民族と民族のあいだでも同じなんだ。</p>
	<p>『なぜ世界には戦争があるんだろう。どうして人はあそこの？』      ミリアム・ルヴォー・ダロンヌ／文      ジョシェン・ギャルネール／絵      伏見操／訳 岩崎書店 2011      中・東・南・河 (310)      大昔の人たちも戦争したのかな。戦争はなぜ起こるんだろう。戦争って何だろう。なぜ人間は戦争をするんだろう。様々な質問から「戦争」についての考え方を知ることができる1冊。</p> <p>『子どもたちに伝えたい戦争と平和の詩100』      水内喜久雄／編著 たんぽぽ出版 2010      中・東・南 (911.5)      1904年に発表された与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」から、2010年に応募した20歳の無名の学生の詩まで、100編が掲載されている。「さとうきび畑」、「戦争を知らない子どもたち」などの反戦歌の歌詞も読むことができる。</p>
<p>『ガラスのうさぎ』      高木敏子／作 武部本一郎／画 金の星社 2000      全館 (913) H24年度教科書 - 中学1年      12歳の敏子は、東京大空襲で母と妹2人を亡くしてしまった。さらに目の前で、父を機銃掃射によって亡くし、たった1人で父を火葬する敏子…。どこまでも続く暗闇のような戦中戦後の中を、けなげに生きていく少女の体験記。</p>	<p>『ひめゆりの少女たち』      那須田稔／著 偕成社 1977      中・東・南 (913)      太平洋戦争中、沖縄戦で散っていった女生徒隊「ひめゆり部隊」の少女達の話。      この戦争で、十代の少年少女が銃をとり、最前線の看護婦として兵士とともに戦った実話が書かれている。</p>

<p>『ふたりのイーダ』 松谷みよ子／著 司修／絵 講談社 2006 中・東・南 (913) 直樹と妹のゆう子の兄妹は、お母さんの田舎で、誰かを求めて歩きまわる小さな椅子と出会った。この椅子のことを直樹が調べていくと、イーダという女の子を探していること、悲しい事件があったということがわかってくる。</p>	<p>『私のアンネ＝フランク』 松谷みよ子／著 偕成社 1979 中・東・南・河 (913) 「アンネの日記」をきっかけに、ゆう子はアンネにあてた日記を書きはじめる。次第にゆう子は、アンネに向けられた「いわれなきにくしみ」の意味を知ることになる。</p>
 	<p>『被爆者 60年目のことば』 会田法行／写真・文 ポプラ社 2005 全館(369) (916) H27年度教科書 - 5年 ヒロシマ・ナガサキで被爆してから60年目。被爆体験は歴史上の出来事ではなく、今なお深い悲しみが続いている。戦争・平和・生きることの意味を、6人の被爆者の言葉と写真で綴った写真絵本。</p>
<p>『対馬丸』 大城立裕／作 嘉陽安男／作 船越義彰／作 理論社 2005 中・東・南 (916) 昭和19年(1944年)8月22日。沖縄から本土に向かった学童疎開船「対馬丸」は、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、深夜の海に沈んだ。乗船者1661名、うち学童800余名。生き残った学童はわずか59名。疎開史上、最大の悲劇である対馬丸事件の全貌を伝えるノンフィクション。</p>	<p>『禎子の千羽鶴』 佐々木雅弘／著 学研パブリッシング 2013 中・東・南・河 (916) 2歳のとき広島で原爆にあい、10年後に原爆症を発症した少女・佐々木禎子さん。12歳で亡くなるまで、明るくふるまいながら回復を信じて千羽鶴を折り続けた。「原爆の子の像」のモデルとなった禎子さんの実の兄が書いた、禎子さんと家族の物語。</p>
<p>『地雷のあしあと ポスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちの叫び』(英文併記) こやま峰子／詩 ポスニア・ヘルツェゴビナの子どもたち／絵 小学館 2003 中・東・南 (936) ボスニアの内戦が終わっても、ボスニアの全土には75万個以上の地雷が残っている。いまだに地雷で傷つく子どもたちがあつと絶えない。ボスニアの子どもたちが描いた絵を中心に作られた絵本。</p>	<p>『ハンナのかばん アウシュビッツからのメッセージ』 カレン・レビン／著 石岡史子／訳 ポプラ社 2002 全館 (936) (234) 広島県福山市のホロコースト教育資料センターに展示されている、古びた茶色いカバン。カバンの持ち主はアウシュビッツのガス室で13年の生涯を終えた、ユダヤ人のハンナ。半世紀後の日本でハンナのカバンとであったふみ子は、ハンナがどんな少女だったのか、ハンナを探す旅を始める。</p>



発行 平成27年7月  
編集・発行 宇都宮市立図書館  
問合せ 宇都宮市立中央図書館  
〒320-0845 宇都宮市明保野町7-57  
電話 028-636-0231